

回想

山上笙介

一

平成六年十二月のことである。

〔弘前大学国史研究会〕恒例の忘年会が開催されたが、席上、私は、「乾杯の音頭をとれ」と、会長に指名された。

忘年会の乾杯は、慣例として、出席者のうちの最年長者が、音頭とりをすることになっているという。

いわれて、座敷を見まわせば、荒井清明先生がいらつしやらない。荒井先生は、私よりも一歳年長の昭和三年生まれで、副会長の要職にもあり、乾杯の音頭とりには、最適の人物である。それが、風邪きみとやらで、めずらしく、欠席されていたのである。

いたしかたなく、なんとか勤めを果たしたけれど、胸中を一抹の悲哀が吹き抜けた。

（若いつもりでいたのに、とうとう、最年長者になったか……）

あらためて見たせば、なるほど、まわりは、会長を筆頭に、みんなが年下であり、ずいぶん、若い人たちが多かった。

おもえば、馬齢をかさねたものである。

——次の心理的な衝撃は、旧脈に受けた。

これも、忘年会の席と思うが、会長から、「来年、『国史研究』が一〇〇号を向かえるので、本会の昔のことを書いてほしい」と、〈下命〉があつたのである。

（ムカシのこと？ 私もそんな古参になつたのか。いつのまに……）と、自問自答せざるをえなかつた。

指おり数えれば、たしかに、入会してから二十五年が過ぎている。

しかし、私は、けつして、良い会員だつたとはいえない。年一回の総会と懇親会、忘年会には、かならず顔を出しているが、『国史研究』には、原稿をほとんど提出していないし、例会への出席も怠けがちである。ただ、会費と誌代の未納のないことが、とりえというにすぎない。

二

〔弘前大学国史研究会〕が結成され、機関誌『弘前大学国史研究』を創刊したのは、昭和三十一年十一月のことという。

私の入会は、昭和四十五年と記憶しているから、十五年も遅れている。しかも、その前は、会の存在すら、おぼろげだったのである。

昭和四十一年、私は、陸奥新報社に勤めており、郷土史ものの企画連載記事を担当させられた。陸奥新報は、昭和三十三年に、「つがるの夜明け」と題して、津軽の太古から近世の初めに至る企画記事を連載し、好評をえたことがある。それを受け継いで、津軽の近世史物語を書けというわけである。

ところが、私の場合、歴史ものは好きでよく読むし、常識でいどは持っているが、深い知識はまったくといいほど無い。そこで、多くの書物と、研究者たちのアドバイスを受けて、物語を進めることにした。

当時、津軽史の研究界には、大きく分けて、ふたつの流れがあった。

一は、明治・大正期からつづく「陸奥史談会」の人びと（「つがるの夜明け」は、この会の長老たちの談話に依っている）、一は、弘前大学の歴史学者を指導者とする教育者たちのグループ、すなわち、本会である。

私は、後者をえらんで、助言を得ることにした。そのころ、このグループには、羽賀与七郎弘大教養部教授、小館衷三弘前実業高校教諭、荒井清明弘前中央高校教諭、蝦名庸一弘前南高校教諭ら、錚々たる先生がたがおられ、陸奥新報の「郷土を科学する」という連載企画ものに、健筆をふるわれていた。

新聞記者とは、トクなもので、これらの先生方は、協力を快諾され、私の週一回の連載企画「続つがるの夜明け／よみもの津軽藩事変史」は、まア、順調にスタートした。

ところが、ある日、一本の電話がかかり、これが、私を本会により接近させた。

三

宮崎道生弘前大学人文学部教授（当時の本会会長）——それが、電話の人であった。

宮崎先生の電話は、私の記事について、いろいろと、批評や指摘をくださった。できるだけ、伝説や俗談を排したつもりだったが、やはり、〈古い郷土史〉の残滓がみられたのであろう。先生の御指摘は、いちいち納得できるものであり、恐縮させられた。

先生は、記事が出たあと、かならず電話をくださいされ、お叱りやらお褒めやらで、私を一喜一憂させた。そして、ある日、「いちど、私の研究室にお出でなさい」と、先生はおっしゃられた。

私は、お言葉に従って、人文学部国史第一研究室の扉をたたいた。お声にだけは接しているが、初対面であった。端然と、もの静かに教えてくたさる先生であった。

私の宮崎研究室がよいは、以後、毎週のようにつづいた。先生は、懇切丁寧に講義をされ、あるいは、若輩の私と、熱心に討論してもくだされた。つまり、私は、宮崎先生の私的な聴講生になったのである。この〈通学〉は、新聞連載（二年間）が終るまで継続し、そのあと、記事を書き改めて刊行するときにも、惜しまず御意見をたまわった。

そして、昭和四十七年六月、先生は、弘前を去られた。

それに先立つ昭和四十五年、私に本会への入会をすすめたのも、宮崎先生である。

このころ、入会するには、会員二人以上の推薦が必要というので、私は、羽賀・小館・荒井の三先生にお願いした。

もつとも、当時でも、そんな入会規則はなかったという説もあり、とすれば、私の記憶ちがいになるが、あるいは、私が大学関係、教育関係者でもない、まったく〈外様〉の人間なので、特別な措置だったのでは

ないか——と、臆測したりもしている。

四

機関誌『弘前大学国史研究』の創刊は、前にも述べたが、昭和三十一年十一月三十日付であった。初めは、孔版謄写印刷——俗にいう〈ガリ版刷り〉だったのである。むろん、手書きであつて、〈ガリ切り〉は、小館衷三先生がおもに担当されたと聞いている。

私が持つ『国史研究』の最も古いものは、第五五号（昭和四十五年四月発行）と第五六号（同年十一月）であるが、まだガリ版刷りで、小館先生の筆跡がなつかしい。

次の号から十冊ほどは、どこに紛れこんだか、ちよつとみつからず、第六七号（昭和五十三年四月）がある。この号は、すでに活字印刷になつていて、それが現在にいたつてはいるのだが、ページ数が増加し、内容も充実してきたことは、よろこばしい限りである。

昭和五十三年十二月、本会のなかに、『藩政史研究会』ができ、第一回会合を二日に開催した。これは、研究活動をより活発化しようと設けられたもので、二カ月に一回、有志の発表や報告などがある。会場はおもに、旧市立弘前図書館の会議室が借用された。

『国史研究』第九五号の「藩政史研究会五〇回の歩み」によれば、第一回は長谷川成一現会長の講話「藩政史研究の動向」だが、第二回には、なんと、私自身が話題提供者として登壇しているのである。そのころ刊行した拙著『津軽の富籤』をサカナにしたもので、多くの意見が出され、

勉強させられた。

その後、第六回と第三〇回にも引つ張り出され、あわせて三回といいたいところだが、後者は、小館衷三先生と二人で一回分を担当しており、じつは、二回半であった。

〔藩政史研究会〕は、第五〇回をもって発展的に解消し、第五一回からは、本会の「例会」になった。そして、昨年十二月九日で、第五七回を数えた。継続開催に努力された福井敏隆先生ら担当委員に、敬意を表したい。

五

三十年に近い年月のなか、本会を通じて、多くの人と知り合い、親しくさせていただいた。物故されたかたがたもあり、いまさら、なつかしくおもい出される。

羽賀与七郎先生。弘前大学教養部教授、本会の副会長でもあられた。風貌・人格ともに円満で、一種とほけた味が魅力であった。もともと数学者だが、和算史から津軽史の研究にはいられたとのことで、当時、精力的に資料を発掘し、多くの論文を発表されていた。津軽家『日記』

（弘前藩庁日記）を通読し、写本したというのが自慢のひとつであった。このころ、コピー機は、現在のように精巧ではなく、資料を写してとるには、手書きか、写真撮影によるしかなかったのである。このために、先生は、写真術をも勉強し、研究室にD・P・E設備を持っておられた。酒をこよなく愛し、日本酒党だった。晩年、健康を少し害されてから、

（清酒の水割り）をチビチビとたしなんでおられたのが、脳裡にのこっている。

八木橋武實大兄。御存知「八木橋文庫」の創設者である。長く「陸奥史談会」の幹部を勤められたが、本会の会員でもあり、所蔵資料をころよく提供してくださった。私の『続つがるの夜明け』をはじめ、すべての刊行物は、ほとんど、「八木橋文庫」と、市立弘前図書館の蔵本に依る。八木橋大兄は、ビール党。羽賀先生と私と三人連れで、しばしば夜の紅灯街を徘徊した。お二人の寿命をちぢめた責任の一端は、あるいは、私にもあるのではないかと、後悔のひとつもある。

小館衷三先生。はじめ弘前実業高校教諭、のちに東北女子大学教授、本会の前副会長。宗教史でたいそうお世話になった。酒類はたしなまず、几帳面な人柄であられたが、気さくで、興にのれば古い唱歌を高唱するような稚気にみちた一面もみられた。

いまは、すべて、思い出のあなたにある。

（やまがみ・しようすけ 新編『弘前市史』執筆編集委員）